昭和六十年七月二十八日史跡めぐり資料

史跡めぐり資料

荒川線沿線の史跡

回向院
延命寺
鬼子母神
法明寺
妙行寺
善養寺
正方院

越谷市郷土研究会
山田政信

刑場跡周辺

一、小塚原縄手

国電南千住駅を南に行くと奥州・陸羽街道（コツ通り）に出て、その正面に小塚原回向院がある。

回向院が本所の回向院の別察子院として、寛文二年（一六六二）に幕府から賜ったとの地は、小塚原縄手とよばれていたところである。

今ではこのコツ通りは拡幅されて、人家商店が立ちならびにぎやかな商店街を形成しているが、明治初年の地図を見ても千住下宿からはずれた両側一面田圃のなかの一条の道でしかなかった。

縄手とは一すじに真直に続いた道を云うのであるが、あたりに人家や人気のない場所であった。

又南千住と云う地名は千住宿が大橋南に加宿され下宿または南組と呼ぶようになって出来たものであるが、古くは小塚原とよんでいたのである。

小塚原の名は、天王社の小（古）塚、或は、その別名牛頭（ごず）ケ原からおこったとも、円通寺の塚からおこったともいわれているが、大体元禄年間からは、南千住の地名と併用されてきたようである。

小塚原は「こつかっぱら」といい、小岩原、古岩原と書いたようだが、正保の頃からは小塚原村と記せている。

さらに、この南千住を「こつ」とも呼んでいる。

小塚原（こつかっぱら）を略してこうよぶという説と、火葬場にちなんで骨（こつ）とする説とがある。

二、小塚原刑場

わが国の罪刑史上に特異な存在を占めているのが小塚原刑場である。

江戸の近傍で磔（はりつけ）、獄門、火罪、斬罪などを行なう場所として、品川と浅草（場合によっては板橋を入れる）はお仕置場の双璧をなすものであった。

この浅草お仕置場は奥州・陸羽街道の小塚原縄手の西側にあって、はじめは本所回向院の持地であった。

間口は六十間余、奥行は三十間余のおよそ二千坪位のものであった。

この地が処刑場になった年次はあきらかでは

ない。

始めは、本町四丁目、ついで鳥越橋傍、聖天町と移って、この地にきたものである。

ともあれ、本所回向院の持地としてこの地を幕府から賜わったのは寛文七年（一六六七）のことで、万治三年（一六六〇）に牢死者や無縁の者を埋葬し、霊を弔うために建立した本所回向院が、すでにその埋葬の余地がなくなったからである。

明暦三年（一六五七）から元禄十二年（一六九九）の間の刑罰事例九七〇余件を分類編集した明和九年（一七七二）の「御仕置裁許帳」に千住火刑のことが出てくるしさらにその前年の明和八年には有名な杉田玄白、中川淳庵、前野良沢らが、小塚原で刑死者の腑分をしたことが記録されているから、この頃からすでにお仕置場として使われていたのであろう。

いずれにしてもこの地に明治になるまでに埋葬された死者の数は実に二十万にのぼるといわれている。

明治に入っても斬罪、梟首がここでおこなわれて埋葬されている。

明治十二年にここで世に毒婦の名を馳せた高橋お伝の斬罪がおこなわれているが、その翌年になって梟首場が不要とされ、その名を監獄埋葬地と変えている。

ところで、埋葬とはいえ実は名のみであって、死体は取り棄てられたのと同様であったようである。

土をわずかに掘ってかけておくという状態であったから、臭気がひろがり野犬が喰いあらして荒涼たる状景を呈していたのである。

三、延命寺首切地蔵（延命地蔵）

刑場の一角に刑死者の菩提を弔うために石の地蔵が建立されている、罪があろうが、なかろうが、死者に対して平等に回向すると云うのが民の心なのであろう。

回向院の建立から七五年たった寛保元年（一七四一）に高さ一丈二尺の石の地蔵が建立されて、二三五年のあいだ風雨にさらされながら血なまぐさい歴史を語りかけている、その台座に刻みこまれている発願者は

木場深川　伊八

海道大工町　喜之助
木船町　五郎兵衛
花町　利右衛門
横山町　長左衛門
相模屋　七左衛門
伊勢屋　新八

地蔵尊は花崗岩の寄せ石造りで二十七箇から出来ている。

この首切地蔵（延命地蔵）はもとは貨物線の南側にあったものが現在地に移されたのである。大工事であったと思われるが、明治二十八年のことである。

首切（延命）地蔵と交通網との因縁は浅からぬものがある。

もともと五街道の一ツとしての陸羽・奥州街道に面し、石神井・王子用水である音無川がすぐ傍を流れて地蔵橋の名を伝えたこの地に、日本鉄道会社が土浦線を計画、上野―田端―南千住を開通、南千住駅を開業したのは明治二十九年十二月二十五日のことであった。（日本鉄道は明治三十九年十一月国鉄となる）常磐線が上野―日暮里―三河島―南千住―を走るようになったのは明治三十八年四月一日からのことである。

従って首切（延命）地蔵の移転は土浦線工事の一貫として行ったもので回向院はこの時から分断されたものである。

尚、延命寺は昭和五十七年十一月二十日回向院より分離独立して、延命地蔵尊の名にちなみ延命寺として開山をした。

是迄移って戦後の東京の新しい交通として登場してきたものは地下鉄である。地下鉄日比谷線は昭和三十八年から高架でこの傍を通ることとなった。地蔵のもとの位置はこの高架線あたりとされている。

八十八年前までは鬼火もえる荒原であったと誰が想像し得るであろうか。ここに二十万余の怨念と血と涙を吸いとっている土地があることに深い感動をおぼえるのである。

四、回向院

ところで、昭和四十七年から隅田川貨物線と陸羽・奥州道（コツ通り）と交叉する区内屈指の魔の場所である大踏切の立体交叉と、道路拡幅工事が始められて、回向院そのものも削りと

られるという事態が発生した。

その工事によって道路面から首だけが四十人分掘り出され、昭和四十八年一月には緑黒石の荒石の標石三ケと首骨が掘り出された。

昔の陸羽道は大八車がゆきかうほどの道幅で田圃のなかを一条往来するものであったから、道の拡幅をおこなえば墓地を掘りおこすこともなったわけである。

そういうわけで回向院のある小塚原縄手の道はきわめて細く宿場に入ってからやや道幅も広がっていたのである。

さて、回向院は前述のような道路の拡幅で旧本堂を取りこわして昭和四十九年十月に現本堂を再建した。

草ぼうぼうの荒れ地であった縄手から二百年余り再建と道路の拡幅によってわずか一メートル半ぐらいの地中から掘づめの頭蓋骨が二百ほど掘り出されて、はからずも往時の刑場跡地が白日のもとに露呈した。

常磐線の鉄路、さらに地下鉄日比谷線の高架が通って旧刑場跡との間を分断して、首切地蔵との間を隔ててはいるが、そこには二十万人の怨念と血と涙を吸いとった土地が今もあるわけである。

さて回向院の面目は一新して暗さは影をひそめており、入口には誘拐された村越吉展ちゃんの地蔵が新たに建てられ、右側面にはわが国洋学史上特筆されてよい杉田玄白ら先覚者を顕彰するために大正十一年に建てられた「観臓記念碑」。右正面には「蘭学事始」とのみ書かれた橋本左内の墓がある。

一度は左内の故郷の福井に移されたが、再び小塚原に運ばれたものという。

建物をくぐって一歩中に入るとさほど広くはない墓地に墓石がびっちり立ちならんでいる。

吉田松陰、頼三樹三郎ら、安政の大獄にかかわった人々、桜田門事件や坂下門の安藤閣老襲撃事件など、幕末、国事に奔走してたおれたおびただしい志士の名が刻まれた墓はどれも小さい。

相馬大作や櫻井竜堆、二・二六事件で半乱軍の指揮をとった磯部浅一の墓もあるし、変り種では怪盗ねずみ小僧次郎吉、腕の喜三郎、河内山の芝居でおなじみの直侍と片岡直次郎、毒婦高橋お伝、さらには桜田門外で井伊大老をたおした関鉄之助の愛人である吉原の遊女滝本の墓など指を屈するにいとまがない。

やりきれない歴史が余りにも多いなかに、わずかな救いをあたえてくれるものは「蘭学事始」である。

明和八年に杉田玄白らが小塚原刑場で腑分を見て「解体新書」の翻訳が完成し、近代医学の曙光をつげる快挙を記念した「観臓記念碑」があることである。

資料（参考）

荒川史談

荒川区史跡散歩

山吹の里

南蔵院と氷川神社の前をゆくと、間もなく面影橋に出る。その川のほとりに、右の手を頬にあてている観音像があり、上に「山吹の里」と大きく深く彫まれた石を見ることが出来る。これが世に「山吹の里」と呼ばれたところである。明治末期までは、この辺り一帯山吹の群生したところで、又の名を棣棠村（やまぶきむら）とも書かれていたのはそのせいである。

七重八重花は咲けども山吹の　みの一つだになきぞ悲しき

ここは太田道灌の和歌で知られた地名ということができる。

言葉書の和歌の意より発心し遂には歌人

山吹の里

道灌といわれる程になったといわれるが、果して道灌がこうした言い伝えのような動機からか、いくつかの疑問が残るようである。

道灌は九才にして鎌倉の建長寺に入り、経書習字を学び、十一才の頃には文章をよくした程の人であるから、このことは実際にはあり得ないといってもよいであろう。

ただ歴史上に趣味ある美談として伝えられているので価値ある、此の地における美しい挿話として長く残して置いてよいのであろう。伝説はそのままでよいのである。

雑司が谷界隈

地名のおこり

雑司が谷の地名は古く、その起源に就ても諸説がある。

(一) 法明寺の雑司料なりしゆえ

(二) 小日向金剛寺の雑司料なりしゆえ

(三) 元弘、建武の頃、京都の朝廷で雑式の職をつとめた卿下若狭、長島内匠、戸張平次右衛門等南朝の衰えるを歎いて官を辞し此の地に土着し其子孫も村民として残りしゆえ

(四) 曹司とは郡領などの子を指して云うので郡領の子等の初めた土地という意で此の地名が起きた

という四説にしぼることが出来る。

古書に依れば「曽司谷」（江戸雀）「曹司谷」（江戸名所記）「僧司ヶ谷」（御江戸図説集覧の図中）「雑司ヶ谷」（遊歴雑記）「雑司谷」（江戸名所図会）更には「蔵主ヶ谷」「雑士ヶ谷」（新編武蔵風土記稿）の文字が記されている。

いずれにしても鎌倉時代以後に起った地名であることは間違いないと思われるが、「雑司ヶ谷」に一定されたのは徳川八代将軍吉宗が放鷹のため、この地に来た時「雑司ヶ谷」村と書くべしとして、それ以後使用されるようになったと伝えられている。

鬼子母神堂

当区内の最古の建造物は言うまでもなく鬼子母神堂である。

このお堂は、上野寛永寺や浅草の浅草寺のような宮様お持ちの社頭ではなく、凡僧の別当地であるけれども、四方に高閣を設けることをご免許になっていた唯一のものであったといわれている。鬼子母神のおこりについて、その略縁起によると、正親町天皇の永禄四年（一五六一）五月六日雑司谷の柳下若狭の下男山本某と云う者が清土（目白台）の畑を耕していると、鍬の先に光るものがかかり、取り上げてみると仏像に似ているので、持ち帰り東陽坊（大行院）の日性に見せたところ、鬼女母神の像と判ったので同寺に納められたが、この院に仕えた一僧が、天正五年密かにこれを郷里の安房に持ち帰ったところ、日ならずしてこの僧は発狂し口走るに「我は武蔵国雑司谷の鬼神、古くは名家に崇敬されたが久しく泥土の底に隠れ、今彼地に衆生機縁既に熟せるゆえ、再び出現して済度すべき時を得たるに此僧が故なく誘い来るを安からぬ。みな人疾く我をその処に送り還せよ。さなくばこの僧にたたりあるばかりでなく、この国の人にも辛きめを見せるであろう」と。里人たちは大いに驚き直ちに東陽坊に仏像を返納したのである。このことが四方に伝わり、日に日に参詣人が多くなり、篤志家の相談の上堂宇建立を企て古くから有った武蔵稲荷の社を拓いて堂をたててこの仏像を安置したのが鬼子母神の初まりだと伝えられている。

その後大行院（今の法明寺）が前田家によって建立され、その嗣子利常は大行院を庇護したので、ここの住職は前田家へ出入が許されるやうになった。利常の三女満姫も大行院に参詣して、鬼子母神の霊験を知り、広島藩主浅野光晟に嫁したる後も、ひたすら鬼子母神を信仰し、寛文六年（一六六六）には独力で神殿を建立したほどである。

こうしたことからの将軍家や、尾張侯徳川光友の夫人千代姫（家光の娘）なども参詣するようになってから益々参詣人も多く門前は常に市を成すほどに賑わいをみせるようになっていった。この鬼子母神について江戸方角名所杖の書に「鬼子母神の尊像は、楠正成の女の守本尊なりといえり、尊像の脇に楠女の二字あり」とある。和漢三才図会や三楠実録に「楠公のむすめ、この寺

に宿り松樹を植えたり」さらには法明寺縁起に「楠正成の息女夫婦共に立願あり、高祖の尊像を彩色したり」とか「銀杏を植えたり」とかの記録も残っている。

鬼子母神像は丈凡そ六寸ばかりの銅製で、頭上の左右に瘤のやうな角が二つ出ており、目は丸く口は大きく、面貌形容は全く鬼であるといわれ、この容貌は法華経の中に示された訶利帝女、即ち鬼子母神の御姿をそのまま現はれたものとされている。

鬼子母神縁起

鬼子母神というのはインド訶利帝女で、川柳に「洗濯に井戸をかいほす鬼子母神」とあるがその子宝は千人を数えたという。皆神王であるから鬼子母天と称えていた。鬼子母天はもと心が邪で常に他人の子を取って食したもので最愛の子を取られて歎き悲しむものが幾千人となくあり、釈迦如来はこれを聞き、鬼子母天を教化し衆人のかなしみを除こうとして、一人の弟子に命じ、鬼子母天が最も愛している末子の愛奴というのをひそかに奪わせてかくさせたところ、外出から帰った鬼子母天、愛奴の不明であることを知り怒り悲しみ、八方探したが所在はようとして判らずついに釈迦如来にすがったところ、釈迦如来は

「汝千人の子をもつ、その千人中僅に一人を失うてさえ歎き悲しむこと斯の如し。況して三人二人一人しかないのを情もなく取り食う。其の親の悲しみは如何ばかりであると思うか。今より後、他の子を食うのを止めたならば汝の子の所在を知らせよう。」

と懇篤に説くと、鬼子母天は、忽ち深く悟り、仏法擁護の善神となり、今よりして千人の子と共に仏の精舎に留まり守護し、出産する者があればこれを守って安産させることを誓い、さらには子のない者が祈れば子を授け、疾病ある者が祈れば治る。こうした事から「子授け」「子育て」の神となって尊崇をあつめるようになった。

今でも鬼子母神では、「鬼」の字には上の角を書かず「鬼」と書いている。

鬼子母神の玩具

天保年間に出された「江戸名所図会」に「都下を離るるといえども鬼子母神の霊験著しく、常に参詣人絶えず、……風車、麦わら細工の獅子、川口屋の飴をこの地の名産とす」とあり、これによってもその繁昌ぶりを偲ぶことができる。

名物の風車は元禄頃から、川口屋の飴は正徳から、角兵衛獅子の麦わら細工は寛延初めの頃からといわれているが、現在まで続いているのは、芒の穂で作られた「みみづく」だけで、このみみづくは、いつの頃からか、さだかではないが「名所図会」の挿絵にも書かれているので天保以前であることには間違いない。

「風車子持ちの神が売り初め」この川柳を見ても鬼子母神の玩具の中では、風車が一番古いものと思はれる。「遊歴雑記」によると元禄年間に柳下に住む尊右衛門という者が風車を作り、売り出したと記されており、当時はこの風車を持って歩かないと鬼子母神詣でしないようにまで流行し雑司が谷の名物となったといわれる。

「風車子のある神の土産なり」など多くの川柳がそのさまを伝えている。

麦わら細工の角兵衛獅子はそれから後の寛延二年の春、高田四ッ家町裏長屋に住む久米という女が母親を養うのに女の手業ではとても支えられず鬼子母神へ祈願、その折家主の庭に大麦小麦のわらがあるのを見て、ふと思いつき、その夏から麦わら細工を始めたところ、その形が大変に面白いので紙の袴を着せ太鼓など胴につけて角兵衛獅子の形を作り、出来上ったものをいくつも竿につけて売り出してみると、それがことの外よく売れ、後には銭を取って豊かに生活することが出来たという。然しこれらの「風車」「角兵衛獅子」などいつの頃から姿を消し、芒細工の「みみづく」のみが愛されるようになった。

一字一石経塔

上から「奉」「宝」「塔」「一基」と彫ってあり、第二のところがかけている。記憶によれば「納」の字になっているが、「多」とも思はれる。

塔の正面には、南無妙法蓮華経とあり、左右には、さくらが彫り出され、背面には大行院十八世日慈上人の遺文が刻まれている。

この塔は寛政三年川上不白が七十三才の時、こわれた塔を修復し、その下に那智の黒石に自筆で七万個に近い一石一字書き写した法華経を埋蔵したものである。

不白は京都で表千家如心斉に学び、江戸に出て将軍家の茶道の指南をするに及び江戸千家、または不白流中興の祖と称える様になったのである。

一字一石塔

法明寺

威光山法明寺の歴史は、大体において二期に分けて考えられると思われる。

第一期　真言宗稲荷山威光寺時代

第二期　日蓮宗威光山法明寺時代

第一期は、平安初期の弘仁元年に弘法大師空海が此処に稲荷山威光寺をひらいて以来、鎌倉時代の正嘉、正元の頃まで、真言宗の道場としての時代で此時代は土地の発展に又は文化開発に重大な役割をなしたものと思われる。真言宗時代の開基を慈覚大師円仁とする説があるが、弘仁元年は円仁の十七才のときであるから、円仁の開基ではなかろう。

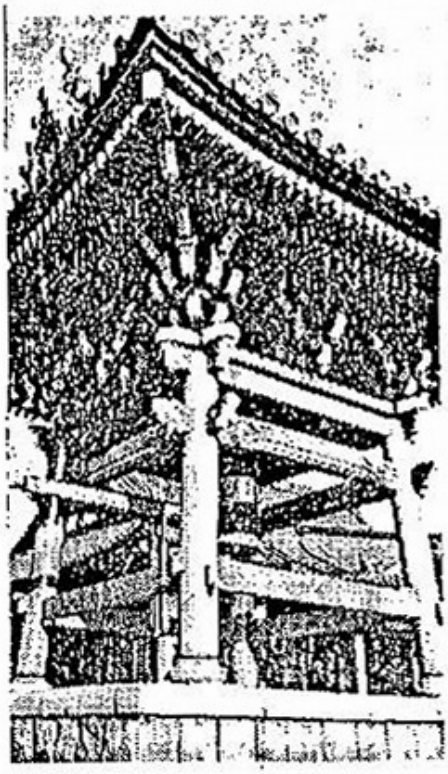
第二期の威光山時代は、日蓮上人が鎌倉に法戦を張られた頃十八中老の一人である日源上人によって改宗され、従来の威光山寺を改称して威光山法明寺と呼ぶようになったのが初めである。

当山に安置されている高祖日蓮大菩薩の尊像は、開基の日源上人の作で、当山第三世日蔵上人が修繕修飾、また補正成息女夫婦が施主となって、さらに彩色を得たものと伝えられている。

法明寺の梵鐘

法明寺の梵鐘は、享保十七年に再鋳されたものであり、当時の鋳鐘名家、太田駿河守久兵衛藤原正義の作で古い形を鋳たものであると、銘にも記されており、ことに面白いのは鐘の下の幅広の縁の部分に、曲尺、算盤、碁、天秤などの形を描いた極めて珍らしい図柄で、なんとなく、享保時代の幕政が、江戸市民に反映しているような気がする。竜頭までの高さ六尺外径三尺、厚二寸許、乳は大体何処のも同じで一面五個五行の二十五、四面合せて、百、四面の陽鋳文字の上部に二個宛合せて百八、いわゆる百八煩悩を象徴したものといわれている。

この珍らしい図様で都の文化財に指定され、戦時中の供出をのがれたのである。



法明寺梵鐘

舜（あさがお）塚

江戸文学、ことに俳句に表はれている雑司が谷は、かなり多く残されている。古くは目白台「疎儀非」に住んでいた国学者であり、俳諧連歌師で、松尾芭蕉の師でもあった北村季吟から記されている。「一僕とぼくぼくありく花見哉」　季吟　これはどこの作かは判然としないが法明寺辺りの花見を詠んだものと考えられる。季吟の手記によれば

「日ながき折は鬼子母神の在す曹司谷も遠からず、護国寺の御寺も老いの歩みに猶近ければ……
……疎儀荘に帰れば日暮れぬ。宵過ぎて月、松の上にさし出であきらけく、ここには今日見し花の色とも見えず馬の声も聞えず……」いかにも当時の鬼子母神通りの情景を眼のあたり見るようである。

法明寺山門左前に「葬」（あさがお）の句碑がある。この句碑は戦前まで寺の岐れ道中央の焼けた樺の大樹の根本にあったものを、現在では玄静院の垣近く押しつけられたところに建っている。碑面には、「葬やくりから竜のやさすがた」　富　久　とあり酒井抱一筆の朝顔の絵が添えて彫られている。

姫　塚

法明寺墓地内に小さな楠正成息女之墓がある。又の名を姫塚と呼ばれている。

「和漢三才図会」及び「三楠実録」には「楠正成この寺に宿り、松樹を植えたり」とあり、又法明寺縁起にも「楠正成の息女夫婦立願あり高祖の尊像を彩色した」と記されている。

この墓は寺内の大杉を切った折、その空洞から出たのを破損がひどく補修改造されたものといわれている。墓の側面には天保九年中沢忠顕建立と書かれたのを見れば、中沢家の武運長久を祈るため楠女の霊を祀ってこの墓を建てたとも考えることが出来る。

姫　塚

外に甲州流軍学中興の祖小幡勘兵衛景憲の墓所がある。初め甲斐の武田家に仕え、滅亡後数年にわたり浪々の生活をつづけ、故あって徳川家に仕官、清廉なる兵学者として寛文三年九十三才の高齢で多難なる生涯を閉じている。

妙行寺

庚申塚のところから北区の西ヶ原、王子にいたる道が、むかしの王子道である。飛鳥山から王子権現（豊島氏が紀州の熊野権現を勧請したもの）へ出ることができる。飛鳥道ともあるが花のころはここもまた飛鳥山に行く人の往来を見たことであろう。

いまの都電（古くは王子電車といった）新庚申塚停留所から王子に向って二、三分のところに日蓮宗、長徳山妙行寺がある。妙行寺は越後本成寺の末といわれ、もと四谷鮫河橋南町にあったが、明治四十二年にこの地に移ってきたものである。お岩様の墓のあるので知られている。お岩様については、四世鶴屋南北の「東海道四谷怪談」があり、この芝居の初演（文政八年――一八二五）以来、幾度も再演されている。封建の世の男のエゴイズムに苦しめられる女の哀れを伝えるものである。

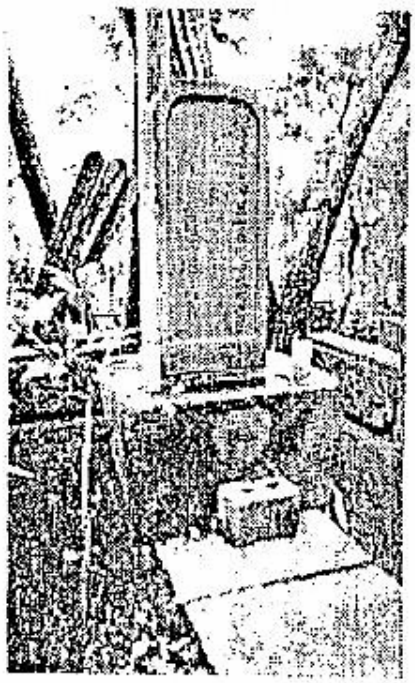
この寺の過去帳にはお岩様の没年が寛永十三年（一六三六）二月二十二日、伊右衛門がその二年後の七月二十二日没として記録されている。お岩様の戒名は得証妙念であったが、田宮家に怪異が続いたので、当寺四世住職日遵大徳が、その戒名を「得証院妙念日正大姉」と改め、お岩様の霊を慰めたという。五輪塔の墓石のまわりには、多くの卒塔婆が立ち並んでいて、その中には俳優のものも見える。伊右衛門の戒名は無念即正禅定門である。

このお岩様の墓所の手前に浅野長矩候夫人瑤泉院の供養塔を見ることもできる。

乾山（善養寺）の墓

妙行寺となりの善養寺も明治四十五年に下谷善養寺町から移ってきたもので、薬王山と号し、天台宗上野寛永寺の末寺である。天長年中（八二四―三三）に慈覚大師がひらかれた寺であると伝えられ、寛永年間に上野山内の北側に移り、享保三年には門前町を許されるほどだったことが「御府内備考」に見える。「江戸名所図会」では運慶の作による閻魔大王像があると記されているが、天保のころに焼失したらしい。現存のものは天保年間のものである。

この寺の墓地に緒方（尾方）乾山の墓がある。碑面に、「放逸無慙八十一年一口呑却沙界大千」とあって、「鬢きこともうれしき折も過ぎぬればただ明け暮れの夢ばかりなる」の歌が、「雲海深省居士」として刻まれている。雲海とも深省ともなのっていたのである。乾山はその号で、幼名は権平、光琳の弟、すぐれた陶工として、画家としても知られた逸話の多い人である。



尼形乾山の墓

西方寺

善養寺よりはずっと今の朝日中寄りになるが、門柱に招き猫のある寺が、弘願山専称院西方寺である。この寺は大正十五年に浅草聖天町から移ってきた。

門の招き猫は「江戸著聞集」にこんな話が残されている。江戸吉原の三浦屋に薄雲太夫という名妓がいた。猫を大変かわいがっていたが、あるとき厠にゆこうとすると猫が着物の裾を噛んではなさない。叱ってもはなすどころか形相けわしく、彼女は恐れて人を呼ぶと、楼主の治郎右衛門が脇差しで猫の首を切りおとした。するとこの血だらけの首が、今しも太夫に襲いかかろうとしていた厠の下の大蛇にかみついて蛇を殺したというのである。薄雲太夫は猫が、飼主の命を守るため、自らの命をかけたことを知って大いに悔やみ、西方寺に猫塚を営み、招き猫の像を作って弔ったという。それがこの招き猫のおこりであるとされている。

西方寺の門柱の招き猫

境内に入ると、太字に高尾塚と彫った自然石がある。「新吉原竹屋七郎兵衛建」として「人こころまつにひとしきとのあらばときわのいろをともにちぎらん」の歌が読める。三浦屋の高尾太夫の歌である。

正法院

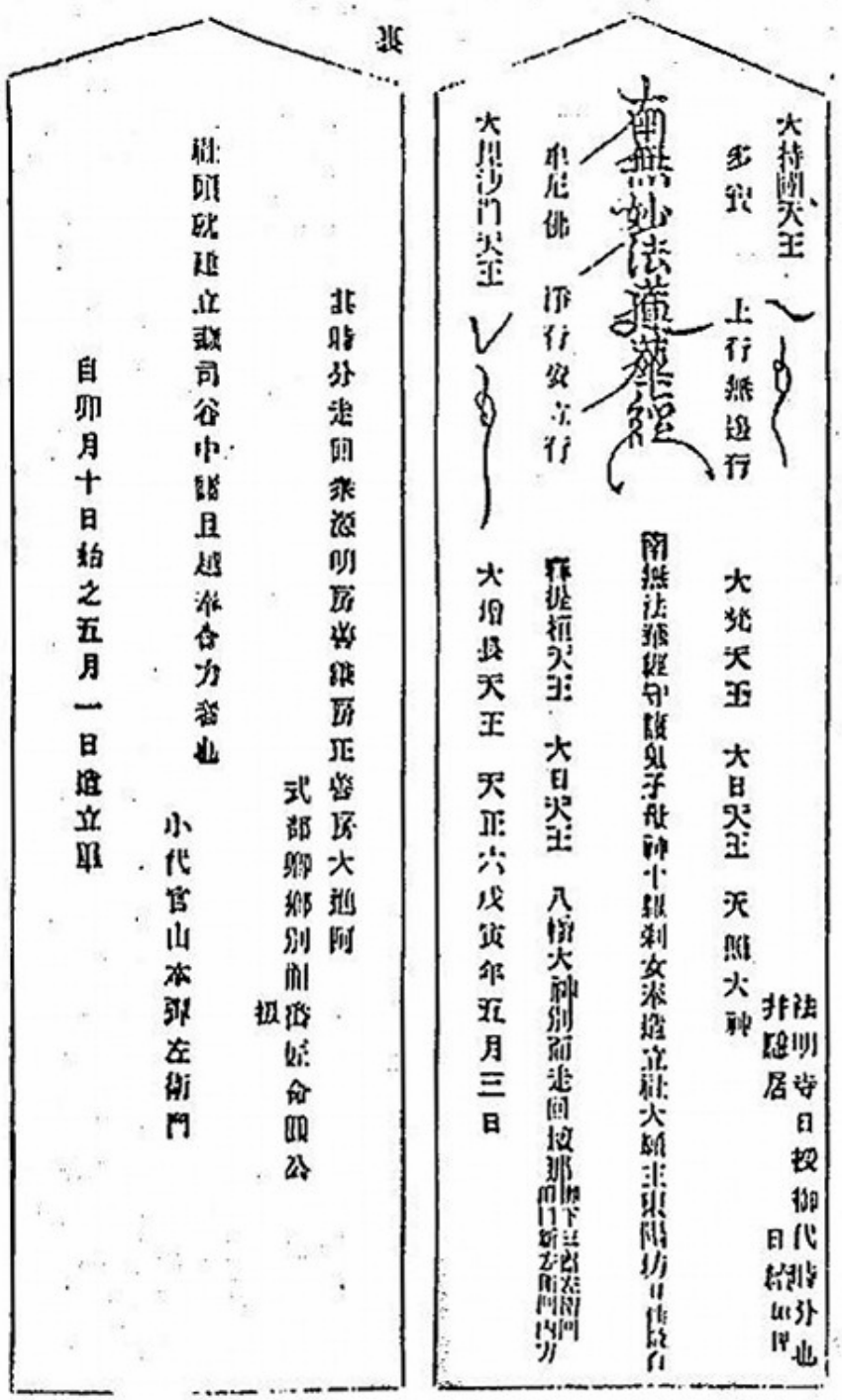
天台宗の慈雲山長栄寺正法院は、寺伝によれば、天平二年（七三〇）に、行基によって創建されたという。天慶三年（九四〇）、平将門討伐の軍をすすめた藤原秀郷が、戦勝祈願をしたという下谷神社の別当寺である。はじめ上野の山内にあったが、のち山王下に転じ、更に車坂に移った。明治の神仏分離令によって下谷神社の別当をやめ、同三十八年に現在地に移ってきた。

この寺では、今日でも火伏のお札を授けるが、これは寛文八年二月の大火の折、下谷神社と氏子の大部分が類焼から免れたのは、神徳によるといって、火伏の護符を出すようになったということである。なお、この建物は上野輪王寺から移されたものであるので、鬼瓦をはじめ諸所に、十六弁の菊花の紋章がついている。また、ここの境内一隅に、石神井神社と同じように、石器時代の遺物とみられる長さ一米の石棒が祀られている。

正法院

追録

鬼子母神堂 棟札（新編武蔵風土記稿ヨリ）



表

大持國天王　多寶　上行無邊行

南無妙法蓮華經

釋迦牟尼佛　淨行安立行

大聖沙門天王

法明寺日授御代時分也
非隱居　日給如日

大光天王　大日天王　天照大神

南無法華經守護鬼子母神十羅刹女奉造立社大願主東陽坊日信石

釋提桓天王　大日天王　八幡大神別而走回坂那（下三宮左衛門尉　四日新左衛門内方）

大增長天王　天正六戊寅年五月三日

裏

非時分走回奉願明房尊雄房正尊房大進阿

武部卿郷別而為姫命願公　扱

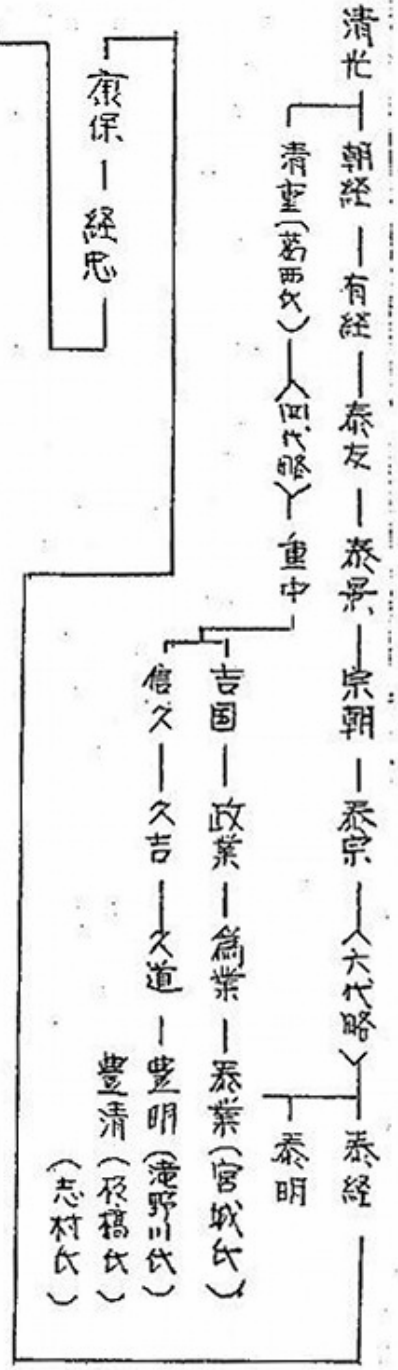
社頭就建立願司谷中幣且越奉合力者也

小代官山本弾左衛門

自卯月十日始之五月一日造立畢

追録

豊嶋氏略系図　（泰盈本豊嶋系図より）



十王

一　秦広王（不動）　一七日　……三途川　奪衣婆・懸衣翁
二　初江王（釈迦）　二七日
三　宋帝王（文殊）　三七日
四　五（伍）官王（普賢）　四七日　……秤量舎　罪の秤・罪の鏡
五　閻魔王（地蔵）　五七日　……浄玻璃鏡・人頭杖
六　変成王（弥勒）　六七日
七　泰山府君王（薬師）　七七日
八　平等王（観音）　百ヶ日
九　都市王（勢至）　一年
十　五道転輪王（阿弥陀）　三年
十一　蓮上王（阿閦）　七年
十二　坂苦王（大日）　十三年
十三　慈恩王（虚空蔵）　三十三年